或る農園での話

ある男が村を通る時、必要の村人が彼れを取りまいた。だれかゞその男に言つた『オイ [illegible] や [illegible] んだ』それに答へて『時が報ぜられたら君等は集つて共に來るのだ。[illegible] が [illegible] くらふ、[illegible] へ [illegible]『そ [illegible] 家の有るものはそのまゝ住んで居て [illegible] だ。家の無い者は人々に向つて『オレの家を建てるのを手傳つてくれ』と言ふんだ。用器を持つてゐる者はそれを持がやし仕事の有るものはその仕事をやる。家畜が自分の出來る丈け働いて自分と仲間のために 穀や實を作るやうにするんだ。

そして集會所には二冊の帳面を置いて皆がそれに書き入れるんだ、一冊には自分は何々の仕事をすると書き、今一冊には自分は何々が入用であると記して置くのだ。そして、その人が何をどんなにするかといふ力量とくらべずにてんでの入用なだけのものを受取るのだ。それは力の強いのがその人のほこりでもなく弱いのが恥でもない、上戸なのが手柄でもなければ下戸なのが罪でもない、それは力の有るない、早い遲い、器用不器用は、お互にそなはつた、有りつたけより、どうする事も出來ない事實だからだ。しかし、めいめい自分の心の鐵槌を受けるんだ、その時自分の出來る丈け働いた者は、人に對してやましいところは無いはずだ。

もし怠けてゐて必要以上に求める者があつたら、分與のある男女が語りあつて親切にその原因をしらべてみる、そして、その人に、そんな行ひをする動機をたづねてみるそして、もし、それに答へなかつたら靜かにほうつて置いて、必要なもの丈けを[illegible]つて與へて置けばよい。しかし、そんな人が、自分は少しも働かないで、他人の勞働で生活するやうな特權を、得やうとしてがん張つたら、その時は皆なが總掛りで追ひ出してしまつて、入れなければいゝ。働かざるものは食ふべからずである。」

村人はこれを聞いて『しかし、此の村では必要な物品で無いものが澤山あるんだ着物や、鐵器やなんか、他處でなくては出來ないものが入用なんだと言ふ、そこでその男は君等は作つた收穫は皆な食つてしまふのか」と問ふ『イヤ、毎年殘つた幾らかは都會へ賣り出すんだ」と村人が答るそれでは都會なりその他の產地へ通知して、此の村はどれ丈けの農產物が出來て、使ひ殘りは凡そどの位ある、そして何々の物品がどれ程入用だか無いのだと言つてやればよい先方でも又有る物と無い物とを知らせ合つて君等の方の必要を滿たすだらう、こうして互に助け合つて、其れの都合も受けずに、簡單に都合よくお互に、過不足の調節をつけて、樂しい生活が出來るだらう。

又その時には都會の生活を望まない多くの男女が君等の村にも來るだらう、或る者は廻りくどい議論に時をすごすだらうし、ある者は君等と共に働からうと言ふだらう。君等は彼等を試みるのにはたゞその働らきをさへ見れば判斷はつくのであつて、面倒な理窟に頭をいためる必要は少しもないのだ。

「そうしてその時と云ふのは只待つてゐても來ないのだ、[illegible] いた。

小作人運動と警察

佐木善生

「警察がなければこの世は闇だ」とか「政治は國民共同のために行はれるものだ」とか今迄教へられ思はせられて來たが、政治がどんなに行はれていたからとて、俺ら小作人が役人に使はれてゐる様な立場に置かれる以上、使ふ人達に自由は奪はれてしまふ。政治と云ふ事はゴマカシが器用だと云ふ事で、國利と云ふがそれは特別な權力を握つてゐる人達の利益だ。民權と云つた處で私有財產制度の下では金持共の擁護であるばかりだ。

警察は政治の一[illegible]だ。政治が整へば整ふ程、俺ら小作人の平和は益々破壊されるのだ [illegible]、警察と云ふ [illegible] だ。

それだから、役人や地主が思ふ存分コキ使ひ、ドシ／＼搾らうとする時、俺らが堪えきれなくて、少しでも身を護る爲めに、正當防衛の方法を